

年間第 32 主日の説教

金 大烈 神父 2011 年 11 月 6 日 (日)

《猛母三遷の教え ～子どものために、本当に必要なこと～》

今日は、ある司祭(韓長愚神父)から聞いた話を黙想しましたので、紹介します。

中国には儒教という宗教があります。儒教の創始者は孔子ですが、孔子と並んで有名な孟子という人もいます。孟子は、性善説を説いた人で「全ての人間は優しい心を持って生まれた」という観点から教えていました。

孟子のお母さんには、『^{もうぼさんせん}猛母三遷の教え』という有名な話があります。「三遷」というのは、三回他の場所へ移ったということです。つまり、子どもである孟子のために三回引っ越しをしたという話です。

最初にお母さんが孟子を連れて引っ越したところは、墓地の近くでした。しばらくすると、孟子はお葬式の歌や墓地の前で泣くまねをして遊ぶようになります。それを見たお母さんは、「これではよくない」と考えて、引っ越しをします。引っ越したのは市場の近くでした。やがて孟子は、商人のまねをして、値切る様子や商売の様子をまねて遊ぶようになります。お母さんは再び、「これでは子どものためによくない」と考えて引っ越しをします。引っ越したところは、学問所の近くで、やがて孟子は学問に興味を持ち、勉強するようになります。

これは、『猛母三遷の教え』と言われている話です。母が子どものためにしなくてはいけないことや考えなければいけないことを伝えるよいたとえ話とされています。

しかし、この話をしてくれた司祭には、別の素晴らしい解釈がありました。

引っ越しをした場所が、偶然墓地や市場の近くだったのではなく、孟子のお母さんは、自分から選んで墓地の近くや市場の近くに住んだのではないか、という話です。

孟子のお母さんは、子どもに立派な生き方を教えたかったのです。最初は、生きる意味を教えるために、子どもの頃から生と死に触れられるように墓地の近くを選んで住んだのです。次に、この世の流れ、人間の欲、いろいろな人々の交わりや関わりについて深く教えるために、市場の近くを選んで住んだのです。そして三回目には、生と死、そして人間の生き方をまとめるために知識が必要だと考え、学問所の近くを選んだのです。

『三遷の教え』には、このような、もっと深い意味が隠れているのではないか、という話でした。

私も、今までに何回も「死を考えずに人間的に成熟することはない。本当に上手に生きるためには、キリストが教えてくださった死を考えなければいけない。」と強調して話して来ましたが、全く同じことです。

世の中を考えずに、天国を味わうことはできません。自分はきれいに善く生きていると錯覚している人々が、汚れた俗世の人々を差別することがあります。「世と天国」、「汚い世界ときれいな世界」というような差別です。しかし、私たちが生きている限り、全てが俗世です。山の奥にある修道院も、

きれいなお寺に住んでいるお坊さんたちの世界も、全部汚れているところです。なぜならば、この世では、そこに住んでいる人間自体が汚れなしに生きられないからです。

孟子のお母さんは、このような場所を選んで孟子に見せることで「これがありのままの世界。傷だらけの人生になるかもしれないけれど、この人生を無視して上手に生きることはできない。」ということをお母さんに教えたかったのでしょうか。

日本にも、子どもの教育に関する有名な言葉がありますね。「魚を欲しがる子どもには、魚を買ってあげるのではなく、魚を獲る方法を教えなさい。」という言葉です。日本のよい教育方法の一つ、と聞いています。しかし、実際にそのようにしているのでしょうか。私は日本に来てから、そのように教える親を一度も見たことがありません。実際にはできないから「そのようにしましょう」という教えができあがったのかもしれませんが、しかし、これは本当に大事な言葉だと思います。親として、何がこの子を本当に愛する方法なのかを考えなければいけないと思います。子どもが反発するのではないか、嫌な気持ちになるのではないかと考えて、親が子どもを恐れています。これは親と子どもの関係ではないでしょうか。子どものためならば、命をかけられるのではないのでしょうか。そのような環境で育った子どもは、立派になります。どんな困難にぶつかってもきれいに乗り越えられます。そのような知恵が、今の特に若いお母さんたち、お父さんたちに与えられるようにお祈りをお願い致します。

『猛母三遷の教え』の意味を私たちの人生と一つにして考えてみましょう。

ありがとうございました。